
武装神姫 ~ Veuillez m'aimer ? jamais ~

冬沢 紬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫 ～Veuillez m'aimer ? j'aimais～

【Nコード】

N4709S

【作者名】

冬沢 紬

【あらすじ】

葛木 縁は落ちこぼれの大学生。今日も今日とて武装神姫のフィギュアを買い集めた帰宅途中だった……。突然降りかかる死。そして神姫が実際に動いている世界への転生……。一体彼はその世界で何を考え、どう行動するのか……。 (自称) 正統派の武装神姫、二次創作ストーリー。どうか暇潰しにでもなれば幸いです。

1st Ride (前書き)

書きたくて堪らなかった武装神姫の小説！
楽しんで書きました！

武装神姫ファンの方、イメージぶち壊したらご免なさい！

1st Ride

俺は死んだ。死んだらみんなはどうなると思う？

……死んで、俺は今、戦っている。

——敵位置捕捉、1000ミリ先の障害物陰から……会敵まであと
3……2……1……。

俺の目の前にアルヴオPDW9サブマシンガン^{ワタシ}を構えた敵が姿を現した。超低空を物陰から滑空するようにワタシに接近してくる。

対するワタシの武装はM8ライトセイバーが一振りだけだった。

先ほどの撃ち合いでリボルバー式ハンドガンは予備弾倉も含めてすべて撃ちつくしてしまった。もう一振りあったM8ライトセイバーも敵のリアパーツの破壊に、引き換えとしてしまった。

しかし胸部アーマーとレッグシールドくらいしか防具らしい防具を装備していないワタシにとっては、それだけでも充分な快拳といえる。フル武装の神姫相手にショートソード2本とハンドガン1丁で渡り合うなんて、馬鹿げている。その馬鹿げていることを、ワタシは今やっているんだ。

敵の攻撃はそのほぼ全てが一撃必殺、掠ろうものなら機動性がガクツと落ちて、すぐに勝負が付くのは目に見えている。

一撃も、触れさせてはいけない。

敵神姫がアルヴオPDW9を構えたっ！

ワタシは必死に転がって銃撃を回避する。

カキンッ！

耳障りな金音と共に銃撃音が止み、敵の武器はホールドオープンしたまま動作を停止している。そのままPDWを廃棄したところを見ると、もう残弾は無いらしい。

「っ、！ いい加減に、負けを認めたらどうですの！？」

武器が1つ無くなったところで、敵の神姫の声にもワタシは一々反応していただけるだけの余裕は無い。だから何も考えずに反射で声を出す。

「そつち……こそ！」

お互いが激突する。

持ち替えた敵の武器は、右手にボウソード：ノートウングという名の剣。そして左手にはボウナイフ：リジルという短剣。リジルを前に突き出しノートウングを水平に振りかぶったままで、一直線に駆けて来る。

ワタシはM8ライトセイバーを下段から突きに持っていく……と見せかけてライトセイバーを逆手に持ち替え、敵の右手側に超低体勢で潜り込む。そこには、充分に振りかぶられたノートウング。一見すれば自殺行為だが、違う。それは浅慮というもの。ワタシはさらに、一歩踏み込んだ。

「しまっ……」

——これで、間合いを殺したっ！

そう。武器にはそれぞれ適した間合いがある。一般的にナイフよりも槍は強いが、そこが狭い狭い部屋だったならばどうだろうか。振り回せない槍は唯の重石と化し、使い手を苦しめるだけである。それと同じこと。相手が剣を振りぬこうとするならば、振りぬく前に間合いを潰せば、ワタシの勝ちだ。もちろん、言うは易しであるが。

だが、ここは既に敵の間合いを詰め切った場所。ここからならば致命打にはなり得ない！

「遅い！」

M8ライトセイバーの切っ先が跳ね上がり、狙うは敵の首唯一つ——！

大学生の俺は、落ちこぼれた。俺はどうしようもなく神姫が好きで、それに大量の時間と金を掛けまくった。その結果が、落ちこぼれという烙印だった。

だが、俺は全く後悔していない。

食事は毎日2食はエアパスタを食べている。最近では料理本の立ち読みを始めたので、そのレパートリーはとどまるところを知らない

い。そして味も匂いも知らない。

……つまり俺は毎日2回は食事を抜いている、ということである。神姫破産しないのは、非常に割のいいバイトに上手くありつけたというのもあるが、エアパスタが大きいだろう。

俺は今日も講義が終わると同時に、行き付けの模型店へ向かって神姫をお迎えした（神姫を購入すること）ところだった。

通いなれた道。独り暮らしの自宅への道。

「帰ったら……早速作りかけの神姫を完成まで持ってかなきゃな。オリジナル神姫……ある種の到達点だぜ」

ニヤニヤしながら歩く俺……おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名前は葛木縁。くすきゆかりこの女みたいな名前で昔はいじめられていた。だが、今となってはもう関係ないことだ。そもそも知り合いとか、いじめるようなやつすら居ないしな。

大きく溜息を吐く。確かに、神姫達はかわいい。それは間違いない。しかし、公式の設定は2036年なのだ。現代よりも先の未来。そこでは自立稼動する神姫達が、もはやフィギュアでもなんでもなく、パートナーとして存在するのだ！

でも……。

「俺はいつでも準備万端なんだけどなあ。動いてくんねーかな、姫様？」

現実はいかにない。それはあくまで、物語の中のアンリアル。だから俺はいつも夢想する。朝起きて、姫達が口々に「おはよう！」と俺に囁いてくれるのを……。

「へへ……へへへ……」

だから、俺は気が付かなかった。

信号は赤。立ち止まって、腕の中の大切な存在に想いを馳せる。天にも昇る気持ち、というのは正にこのことを言うのだろう。

右方50メートル。ケータイ電話を片手に運転するトラック。

ようやく念願のマリーセレス型とプロキシマ型が店頭に並んだのだ。どれほど待ちわびたことか！

右方10メートル。歩道に乗り上げたために慌ててハンドルを取るも、その大型トラックは大きく傾^{かし}ぐ。

ふと顔を上げると、辺りが薄暗い。周りの人が何かを叫んでいる。でもまあ、関係無いだろう。俺はいつだって独りだったし、独りのほうが好きだ。だから今日も俺ぎやぐえあ

俺は、左にいた。俺は、俺の左にいた。倒れこんだ、毎朝よく見るそいつは、頭部が潰れて悲惨なことになっていた。トラックの下敷きだ。

周りの人にはどうなってるのか見えないみたいだけど、俺には見えた。トラックのあるはずの歩道の上に立ち、トラックの下敷きで見えないはずの俺の死体を見ていた。

その体は、しっかりと神姫を抱きしめていた。

神姫は無傷で、汚れも無く……それだけは胸を張って誇れることだと、俺は満足して、逝った。

白い光に導かれて、俺はどこへ行くのだろうか。天国か……いやいや、地獄だろうか。何にせよ、神姫が無いだろう事が唯一にして最大の心残りである。

「姫達……きつといい人たちに貰われていくんだぞ……」

そして、俺の意識は消えた。

2nd Ride (前書き)

やりたい放題第2話！ どうぞ、お楽しみください！

2nd Ride

「私は、神だ」

痛い。痛くて痛くて、痒くて痒くて、今にも悶えて転がりまわり
そんなほど、痛すぎる一言だった。

「か……カミ!？」

「そうだ……神だ」

俺は呆然とするしかなかった。死んだと思ったら、いきなりグロ
イ自分の死体を見せられたと思ったたらこれである。

なんなんだよ、一体！ 何の嫌がらせだよ、全身に鳥肌が立ちま
くってるぞ。

このまま見合っけていても埒が明かないので、仕方なく口を開いた。

「……で、その……神様とやらが俺なんかは何の用なんですか？」

自称神は大仰にうなずいた後、唐突に話し始めた。

「実はな。私の趣味はフィギュア集めなのだ」

神が、フィギュア……？ からかわれているのか、俺は。

「冗談でもなんでもない。私はいたって本気だ。特に武装神姫がよい。うむ。最高だ。女人と機械という歪な組み合わせをここまで昇華させるとは、人間というのは侮りがたきものよな」

そこまで語ると言葉を切り、俺に改めて向き直った。

「おぬしのその根性。死してなお神姫を守り通したその心意気。誰が認めずとも、我が認めよう。お主こそ私が救うに足る人物である」と

どうやら俺は救われるらしい。しかし救いといってもなあ……。

「だが神様、俺のコレクションはすでに死んだ現世にある。今更やり直しというわけには、流石にいかないだろう？　じゃ、救いつて何だ？」

俺の質問に自称神は満足そうな笑みを浮かべた。そして、俺の頭上に手をかざす。

「我はお主を平行世界に送ろう。そこでは神姫達が動き、笑い、人と語らう……そんな所だ。悪くならろう？」

それって、武装神姫の世界設定の中へ行けるって事か！？

「ほ、本当か！？　なんで……い、いや、聞くまい。頼む俺を——」

そこで、ハタと気づく。

神姫って、その世界じゃ一体10万とか余裕でしなかったっけ？
おれはその事実慌てる。このままの姿で転生させられれば、素性も無い俺がマトモに金を稼げるとは思わない。

仮にどこかの子供に転生させられたとしても、それはそれで困る。
一体金を稼げるようになるまで何年かかるんだ！　理解のいい親だとは限らないし……。

「ふむ、そんな懸念か」

待て。

「心を読むなっ！」

「そうは言われてもな。そういうものだからな、我々神というものは。……まあ、いい。本題に戻ろう」

そういうと右手を大きく掲げた。

「先ほどの懸念は全て必要ない。たった一つのプロセスで全てが片付く。全く気にすることはない。いいな？ 安心して身をゆだねればいい」

「ホントか？ ……信じていいんだな？」

「元より……君に信じる以外の選択肢があるとは思えないのだが」

一々喋り方がイラツとするが、でもきつとこいつの言っていることは正しいのだろうと感じてしまう俺がいる。

数秒の沈黙の後、自称神が切り出した。

「もう、決まっているようだが？」

「……そうだ。ああ。頼む」

俺は……それでも、どんな風になっても神姫と離れたくない。だから、行く。神とやらのご褒美を受け取ってやる。

自称神は「それは重畳」と頷くと、再び俺に右手をかざした。

「安心するがいい。次に目覚めれば、そこは神姫の世界だ。自由に行動して、我を楽しませておくれ」

結局のところ、それかい。

とにかく俺は目を瞑った。

次に目覚めれば第二の人生。

とても、……そう。とても楽しみだ。

光が強さを増していく。俺はそれにゆっくりと飲み込まれていき、いつしか渾然一体となっていた。

そしてどれほど光の奔流の中を彷徨ったことか……。俺の視界が急に暗転した。今までと違い、俺が何かに横たえられているのがわかる。足先、腹、上半身、手先、腕、そして頭……順番に、自分を構成する全ての存在を認識していく。

.....

.....

.....

そして、目を開けた。

目の前には、超巨大な何ちゃら入道。

ガリバー何ちゃら記。

急いで振り返ると巨大なPC。そのモニターに映る自分の姿。妙に機械的な間接。アニメチックな貌。

「な……、何だよこれえええええええ！」

俺は

神姫になっていた。

2nd Ride (後書き)

いやー、バトルなし、主人公も最強言う割にはまだその片鱗も無く……。って、ようやく転生したところじゃないですか。

次回は視点が変わります(サブ主人公)。

もしよければ、評価をポチって下さい！
お願いします！

3rd Ride

僕は結城^{ゆづき} 和一^{かずひと}。今年高校に入学する、新品の一年生……って言うとは何かアレだけど、とにかく新入生だ。

僕はある決意を胸に、ここ……神姫研究会部室前にいる。

武装神姫——優雅に舞い、勇ましく戦うその姿に惚れたのは、僕が中学生だった時のことだ。

当時、僕は何の目的もなくゲームセンターに通っていた。武装神姫というコンテンツにはその頃はまったく興味がなくて、いつも人が集まっているけど完全に無視して通っていた。

ある時、特に何という理由も無かったのだけれど、僕はいつもは近づかないブースに近づいていったのだ。そこで、見てしまった。

そのとき見たのは確かアーンヴァル型とジルダリア型のバトルだったと思う。かつこよくて美しく……僕も高校になってアルバイトして、きつと自分だけの神姫を手に入れてやるんだと決意した。

そして2040年春。僕はここにいた。

深呼吸して、少し汚れている『神姫研究会』という札のかかった扉を今一度見つめる。そして、かばんの中にあるそれを強く意識した。

これから、夢にまで見ていた神姫との高校生活が、はじまる。一歩前に進み、目の前の扉を掴んで……開けようとしたら、唐突に扉が内側から開いた。

「うおっと！……おや？ 君は新一年生かな？」

言っでは悪いが、そう、一言で表すとさえない風体の人がいた。上級生、学年章の色からすると3年生だろうと思う……。

その人はニコニコしながら僕のことを見つめていた。そりゃあ、もしかしたら入部して後輩になってくれるかもしれない人を見たらニコニコするだろうけど……。この人はなんとというか、そういう顔なんだろう。いつも落ち着いてニコニコ笑っているタイプ。

僕はボーっとそんなことを考えていたが、我に返ってあわてて挨拶をした。

「あ、はい！ えと、入部希望の1年です。結城 和一っていいます！」

目の前の人は相変わらずニコニコしながら扉を大きく開き、少し脇に移動して僕の通り道を空けた。

「ようこそ、我らが神姫研究会へ。とりあえず中に入って、色々見ていくといいよ」

そういつて僕を中に誘ってくれた。

「おっと、自己紹介が遅れたね。俺の名前は姫沢 ひめざわ 明人 あきと。神姫研究会部長にして、アーンヴァル使いだよ」

アーンヴァル使い……あの、白くってカッコいいやつか！ って、この人部長だったんだ……。

僕は少しおっかなびっくり、そろそろと部室に入ってしまった。

顔を上げて部室を見渡そうとすると、2対の眼に見つめられているのに気がついた。居た堪れなくなったので少しふりかえり、部長の姫沢先輩を見やる。

僕の目線を『紹介してくれ』と言っていると取ったのか、姫沢部長は僕の方に手を置いて作業中の（驚いたことに、眼は僕のほうを見ながらも正確に手を動かしている！）部員たちに声をかけた。

「ちょっといいかな、みんな。入部希望の1年生だ。名前は……結城 和一君だ。そうだな……まず、自己紹介をしようか」

すると2人とも手を止めて、僕の方に向き直った。

背の高いヒヨロツとした先輩——この人は2年だ——が、まず最初に口を開いた。

「お、俺は加賀^{かが} 啓太^{けいた}。2年だ。は、ハーモニーグレイスを使ってる。よろしくな」

次は加賀先輩の向かいに座っている、なんというか……その、神姫をやりそうにない格好の——あのアクセサリーとか、絶対校則違反だと思う——2年生が口を開いた。

「部長、早速新人ゲットですか！ 相変わらず抜け目無いッスね……。俺は紗羅檀^{すずき}使いの鈴木^{ひろあき} 裕明^{ひろあき}。よろしくな、期待のルーキー君！」

軽そうな見た目に反して、神姫に並々ならぬ愛情を注いでいるらしい。鈴木先輩のカバンから何冊もの神姫関連の書籍が見え隠れしている。

「ホントはあと2人いるんだけどね。いまは居ないみたい」

そう言って後ろから僕を追い越して、部屋の片隅に部長が歩いていく。そしてごそごそと何をか引つ張り出そうとしているようだ。た。

それを見た2年の先輩2人も急いで手伝いに駆け寄る。

「あー、そうツスね。手っ取り早くデモンストレーションとかいいかも」

「そ、そうだね。で、だ、誰がやるんですか？」

先輩たちがトントン拍子に話を進めていくので、僕は何が何だかわからなかった。でも、何か大掛かりなことをやろうとしているみたいだ。神姫つてきて大型つて言う……まさか！

「先輩が神姫で対戦するんですか！？」

姫沢部長は相変わらずなニコニコ顔をさらに嬉しそうに、わざと区切って言った。

「大・正・解」

セッティングを終えたそれは、縦横が2メートル、高さは1メートルもあるつかという巨大な正方形の亚克力ケースだった。中にはケースの底に固定された数々の障害物。

そうだ。これはステージだ。先輩たちの手作りの、神姫たちへの手作りのステージなんだ。

「じゃ、早速やろうか。じゃあ俺と……加賀君。りりこ対エレニアでいこうか」

？ 誰だろうその、『りりこ』とかつて。

「ああ、ごめんね。これ、ウチの姫たちの名前なんだ。結城君も考えておいたほうがいいよ、名前。いざという時に慌てて考えてませんでしたー、なんてなったら神姫がかわいそうでしょ？」

そっか……名前。すっかり忘れてたや……。

「それにね、例えば『アーンヴァルは俺の嫁！』って言ったら、全国のアーンヴァル使いからボコボコにされちゃうんだよね。それも含めて名前をつけてあげるんだ。マスターから姫様への、最初の贈り物だね」

「なるほど。ちゃんとつけてあげないといけませんね……。なにがいいかな……」

「ま、追々考えていけばいいよ。これからデモンストレーションだ。楽しんでほしいな。準備は良いかい？ りりこ」

すると、姫沢部長の胸ポケットからピヨンと飛び降りた、白い影が1つ。アーンヴァル型の神姫！

その神姫、りりこは右手をグツと握ると、明るい声で返事した。

「はい！ マスター。がんばります！」

「紹介するよ。この娘がりりこだ。かやいいでしょ？」

……親バカ、というか神姫バカ……。やっぱりいつもニコニコしていても、部長も神姫バカなんだ……。

「じゃ、じゃあエレニア。頼んだよ」

「うん！ 任せておいてよ、お兄！」

シスター姿の神姫、エレニアはそう答えると、加賀先輩の用意したツールボックスに近づいていった。その中に武装が収納されているらしい。カチャカチャと音がして、中からエレニアの身長ほどもありそうな巨大な十字架を取り出した。それを見た鈴木先輩が、うわぁ〜と声を出した。

「最初つから殲滅十架使う気かよ！ えげつねえ〜。いくらお前がトライ。ン・マキシマム好きだからって、レギュギリギリのそれ使うか普通……！？」

そう言われるほど、凄いものなのだろうか……？ 僕には唯の十字架にしか見えなかったので、何がどう凄いのか鈴木先輩に尋ねてみた。

「パニッシャー？ なんですか、それ？ そんなに凄いですか？」

苦々しげな顔で、鈴木先輩が答えた。

「ああ……。こいつの自作武器なんだけどな、性能が凄すぎるの何の……。レギュレーションがそもそも公式ギリギリのピーキーな設定の上、一部の制限アリ大会では何回かペケ食らってる曰付だ。グレネードとLMGを搭載している上、近接戦でもハンマーとして使ってくる。ネタ元は35年くらい前の漫画な」

そんなものが……すごいなあ、自作まで！

加賀先輩が鈴木先輩のセリフを引き継いだ。

「こ、公式戦だと偶に使えないから、こんな時じゃないとおおっぴらに使えないんだよ。ち、チート扱いされるし。そんなに悔しいなら、じ、自分でも作ればいいのにさ」

「バカ言うな。お前レベルの武器自作ツカーなんて、そうそういてたまるか！」

そう言つと椅子にどっかりと座り、僕に椅子を勧めてきた。

「ほら、座りな。立ったままじゃつらいだろ？」

「ありがとうございます。それじゃあ……」

僕は言葉に甘えて、勧められた椅子にかけた。

相変わらずニコニコ顔の部長が、ニヤリと笑ったような気がした。

「さて、じゃあ始めようか……」

4 t h R i d e (前書き)

ついにバトルに突入！

そして結局、主人公はどの神姫になるの？ って、アレ……？

4th Ride

いよいよ、始まる。神姫同士の戦いが、目の前で！

「オールウェポンフリー。その他は公式戦準拠ね。OK？」

「お、OK。いつでもいい、行けますよ」

シスター型ハーモニーグレイス“エレニア”。武装はロープに腰部アーマー。ロープの下にはどんな防具をしているのかは見えない。そして何より目に付くのは、右手で支えている巨大な殲滅十架^{バニッシャー}。それ以外に武装は見当たらない。

対するは天使型アーンヴァル“リリコ”。武装はスタンダードなトランシエ？タイプを装備している。背面のウィングと、巨大な補助ブースターがまず眼を引く。手に持っているのはLC3レーザーライフル。大きさだけならこちらにも負けていない。立ったりりこの1・3倍くらいはあるのではないのだろうか。そして両腕のホルダーに装備されたM8ライトセイバー。これはmk2セットからの流用装備だろうか？ 元々のトランシエ？はM4ライトセイバーだった気がする。背面にはSMG……あれはヘルゲートブラスターだろう。

そして、姫沢部長が試合開始のカウントを始めた！

「セット……3……2……1……スタート！」

両者、一斉に距離を取った。一際高い障害物の上に飛び乗ったり

りこは、巨大なLC3レーザーライフルを軽々と構えチャージを始める。それを見たエレニアは十字架の長い方をりこに向けた。

「銃口も無いのに、どうやって……？」

鈴木先輩が、楽しそうに答えた。

「まあ、見てろって」

次の瞬間、僕は眼を疑った。エレニアの持った十字架が開いたのだ！ 正確には、十字架の長い部分が上下に割れ、そこから銃身が姿を現した、といったところだ。

「お兄のために、やられちゃえっ！」

エレニアはそう叫ぶと、りこを仕留めるべく凶暴なフォームと化した十字の武器を解き放った。かなり速いサイクルの発射音と共に無数の弾丸がスコールの如くりこを襲う。

しかしりこは軽く2、3歩ステップして後ろに下がると、自由落下して障害物の陰に隠れてしまった。しかし危ういかな、巨大すぎるレーザーライフルが障害物の陰から見えてしまっている！

エレニアはまだ移動していないことを確認し、しめしめとばかりに殲滅十架を構えた。そして高速で回りこむと同時に殲滅十架の全火力を開放した。

そこには……無残な姿のみが残されていた。

それはLC3レーザーライフルのみ、だったけれど。

「ど、どこに……っ！ う、うわああ！」

突如上空から現れたりりこが、ヘルゲートブラスターをフルオートで発射しながら落ちてきたのだ。判定はもちろんりりこの勝ちだった。

「ごめんなさい、お兄……」

「あちゃー、や、やられちゃったか……。仕方ないよ、な、なんてっ たって部長が相手なんだし、久しぶりの殲滅十架だっただろ？」

一方、りりこは対照的に無邪気な笑顔を見せていた。

「やりました、マスター！ りりこ、えらいですか？」

「うんうん。えらいし可愛いしカッコいいし、もう文句なしだね！」

……神姫バカ。

でも、うらやましい。僕も早く自分の神姫を動かしたい！

一通り神姫と戯れた姫沢部長が振り返った。

「さて……案外早く決着ついちゃったけど、どうだった？ もう1戦見たい？」

うーん、もう1戦見たい気もするけど、それよりも……。

「すごく面白かったんです！ ですが、その……早く僕も神姫が欲しくって！」

すると姫沢部長が少し難しい顔をした。どうしたんだろうか。
鈴木先輩も加賀先輩も、ちょっと申し訳なさそうな、何かを堪えるような表情をしている。

なんだか妙に怖くなったので、思い切って聞いてみることにした。

「な、なんでしょうか……？ 何かありましたか？」

ほほをポリポリと掻きながら、姫沢先輩が申し訳なさそうなニコニコ顔になった。

「えーとね、神姫の値段、知ってる？ 部での神姫つてのは無いから、各自で買わなきゃならないんだ……」

な、なんだ……そんなことが。それならもう、たぶん解決済みだな。

「大丈夫です、僕、神姫持つてるんです」

そういつて、僕は鞆を見た。

部長たちはよくわからない、といった表情を見せる。

「さっき神姫が欲しいいつて言っただけ……。あるんでしょ？ ひょっとして、やり方がわからない？」

その通りなんだけど……微妙に違うんだなあ。

「はい、そうなんです。でもちょっと違って……本体は、家の物置の中から見つけたんです。だから周辺機器とかわからなくて……」

鈴木先輩がなるほどねー、と何回かうなずいた。

「じゃ、OSとかさえあればいいな。それなら話はまあ、……あ、そうだ。CSCとかも買ってこなきゃならないんだよね？」

確かにね、と姫沢部長が同意する。

「CSC？　って、なんですかそれ……？」

僕の質問に加賀先輩が解説してくれた。

「CSCってのは、し、神姫の性格を決定付けるものなんだよ。この攻撃と回避にステータス振りたいとか……。ほ、ほら。こういうの」

そういつて見せてくれたそれは、綺麗に輝く宝玉みたいなものだった。

あつたかな、そんなの……。もしかしたら、まだ見てない付属品ケースにあつたかも。

とりあえず神姫を見せて欲しいという先輩たちの要望もあって、僕は神姫を取り出した。

しかし、先輩たちの反応は芳しくなかった。

……いや、寧ろ驚愕している、といった風だろう。

「な、なんだこれ……見たこと無いぞ！？　赤い素体ってことは……ランサメントみたいだけどそんなはずないし、アークでもない……あと全体的に赤いやつってあつたか？」

「べ、紅緒」

「いやいや、あれの素体は黒でしょ……」

先輩同士で意見を出し合うのに、全く僕はついていけない。
やがて先輩の話がまとまったようだった。

「結論。これはオリジナルの神姫だ。他に付属のパーツとか紙とか無かった?」

慌てて僕はその神姫と一緒に物置の中に眠っていたケースを取り出した。

「おお、ふむふむ……。あ、ここが開いて。これが手引書ね……」
ものの数秒で僕が見つけれなかった説明書を見つけてしまった
先輩たち。そして、僕の神姫の名前が判明した。

「これは……こう書いてある。『赤鬼型・デイルージュ』って」

赤鬼型……なんだか強そうだ。かつこいいし!

「お……ご丁寧に、こんな所にCSCまであったぜ! うーん、丁度セットできる限界数、3個か。説明書にはこれを装備して、他のCSCは絶対に使用するなって書いてあるな」

「なら大人しく従うべきだね。オリジナルはとかくデリケートなものだから……」

「で、でもなんだか、もうCSCセットしてあるけど?」

「じゃ、これ予備かな……?」

先輩の助言であれよあれよと神姫のセットアップが進む。クレイドル（ゆりかご状の、神姫用充電器）で初期充電して、PCから神姫のセッティングをしていく。

「これで、あとは起動でエンターするだけだよ。よくできました！これで結城君も神姫マスターの仲間入りだね」

「しかしオリジナル神姫か、いいなあ……」

「だ、誰もが憧れる境地だよな」

起動しようとする、姫沢部長が僕に訊ねた。

「そういえば、名前はもう決まっているの？」

もう決まっている。これしかない、という名前が。

「はい。決めました。この神姫と僕が出会った偶然……それを記念して、『ユカリ』にしようと思います」

そして、僕はエンターを押した。

4 t h R i d e (後書き)

やってしまった、オリジナル神姫……。
いろんな意味で、危ういです！

もしよろしければ、感想・評価等お願いします！

ふお、フォーマット!?

「や、やめてくれ! そんなことをしたら俺が死んでしまうじゃないか!」

冗談じゃない、せっかく転生までして永らえた命、こんなところで死んでたまるか!

俺はあわてて飛び起きて、バックステップで距離を取った。しかし思わぬほどの体躯の反応に、バランスを崩して尻餅についてしまった。

「いつててて……。なんなんだ、これは! うまく体が動かない……」

再びニコニコ顔の男が口を開いた。

「あー、それは仕方ないよ。だって久しぶりの起動でしょ? そしたら各部の磨耗とか油切れとか……」

いや、そういうのじゃないと思う。単純に体の操作に慣れていないだけだ。だって、両手両足の駆動部分自体は滑らかに動く。問題があるのはハードからだじゃなくてソフトこころだろう。

しばらくグーパーグーパーしていたらだんだんと感覚にも慣れてきた。すると、少し周りの状況も見えてきた。

……で、この冴えない高校生が俺のマスターだって?

「して結城とやら」

「な、なあに……？」

妙に緊張しているようだ。俺も緊張してしまうじゃないか。

俺は努めてリラックスしたように、クレイドル（神姫用充電器、PCとの接続にも使う）に寝そべって話し始めた。

「ここは、どこだ？　そして今はいつだ？」

「此代このしろ高校神姫研究会だよ。今は2042年4月2日」

そんなに……俺が生きていた頃から30年も後じゃないか……。一応普通の高校らしい。てか何だ、神姫研究会って。

とにかく、と頭を振って、今最も気になっていることを聞いた。

「俺は、誰だ」

「キミは赤鬼型神姫“デイルージュ”。名前は“ユカリ”だよ」

ユカリ……。元々の俺の名前と同じだ。突然名前を呼ばれた時に反応できないってことはなさそうだけれど、何の偶然だろうか。

そして赤鬼型神姫“デイルージュ”……。これは俺が自分で作っていた、オリジナル神姫だ。何の因果か、ここまで続くと流石に偶然じゃあないだろう。おそらくあのいけ好かない神とやらが、粹な取り計らいというやつでもやったに違いない。

ああ、腹が立つ。

本来ならば俺がマスターになって、姫たちに囲まれてきやいきやいと黄色い声に包まれながら、ステキ神姫ライフを送る筈だったろうに！

そう思うと、目の前でマスターだと自称してヌボーとした笑みを浮かべているこいつが、急に憎らしく見えてくるから人間というのは不思議なものだ。

そうやって怒りを燃料として怒りをさらに増幅させていく悪循環の輪に水を浴びせたのは、件のご主人とやらだった。

「えっと……、ユカリ？　大丈夫？　その、もしよければ早速バトルしたいんだけど……」

「バトル、だと……？」

頭がグルグルしていた俺は、ためていたものをつい口に出してしまった。

「あんたのことは、まだマスターと認めたわけじゃないんだからな！」

立ち上がり、俺はビシッと結城なんちゃらに小さな指を突きつけた。

自称『ご主人』は困った顔をして、後ろのメンバーに相談をした。というか自称『ご主人』、もしかしてお前が一番ヒエラルキーが低いのか。

「どうしましょう……。PCからマスター設定で権限を上書きとか……?」

それにヒヨロツとした不健康そうな男が応じる。

「そ、それより初期化して1から設定したほうが早いような気がするけど」

初期化!? 冗談じゃない! さっき俺がやめろって言ったのを聞いていなかったのか、こいつは!

俺は慌ててヒヨロ男を遮った。

「ま、待て待て待て! 初期化とか冗談じゃない! 落ち着け、な? Be Coolだ。Love & amp; Peaceだ」

慌てすぎて、自分でも支離滅裂だとわかるほど。

ヒヨロ男は「でもな」と話を再開した。

「た、確かに戦闘データはもったいないけど、そうは言っても言うこと聞かないんじゃない、しょ、しょうがないしな」

反射だった。脊髄反射で口に出していた。そうでなければ、生存本能が口を操っていたのだろう。

「わ、わかった! 言うことを聞く。結城とやら、お前の言うことは何でも聞いてやる。だから、な? フォーマットとか、絶対やめてくれ……」

そう哀願して、机にしていた自称……いや、ご主人の手にすがりつく。

俺の中には恐怖しかなかった。恥や尊厳といったものを放り捨ててもしないと、本当に取り返しのないことになる。そう、死ぬのだ。他の神姫たちはどう思っているのかはわからない。しかし、少なくとも俺は、俺の心は人間なのだ。一度目は神とやらの気まぐれで助かった。しかし二度目がある保障は全く無い。いや、その“一度目”すらも普通の人は手にすることができず死んでいく。俺は例外中の例外もいいところ、本当に幸運だったのだ。

二度目は、無い……。

「だから……だから、お願いだ……。死にたくない！俺はまだ死にたくないんだ！頼む、何でもするからフォーマットなんて……」

泣きそつになりながらご主人を見上げる。

ご主人はにっこり笑うと、俺にやさしく語りかけた。

「じゃあ、3つ、お願いね？」

俺はノートPCの隅っこでシクシクと泣いていた。

「汚けがされてしまった……」

それというのも、さっき言質を取られてしまった、『何でも言うことを聞く』が原因だった。ならばとばかりに結城のヤロ……「ご主人様は俺に無茶なことを言い出しやがった。」

約束させられたのは以下の3つ。

1・結城 和一のことを“ご主人様”と呼ぶこと

2・バトルには機会がある限り積極的に参加すること

3・女の子らしい言葉遣いをする事

帰りたい……。

独り落ち込む俺を尻目に、軽い足取りでバトルのセッティングをしているご主人。今は何やら回りの人のお古の武装を借りているようだった。

一段落したのだろうか、くるりと振り返るとまるで穢れなど知らないような笑みを向けた。

「これ、使って！」

手渡されたのは、ずいぶんと使い古されたハンドガンとアサルトライフル。ハンドガンの名前は何だったか……。そこのサードパ

ーティー製のものだろう。見たことの無いリボルバーだ。

アサルトライフルはジャマダハル。AKによく似た量産型の銃である。

何か大切なものが抜け落ちたかのような顔で、俺は呟いた。

「リアパーツは？ アーマーは？ ヘッドセンサーは……？」

ずっと同じ笑みのまま、ご主人は一言答えた。

「ごめんね？」

「ご、ごめんねって何だ、おい！ バトルしたいならせめてアーマーくらいは用意してくれ！ 素体のままどうにかするなんて、夢のまた夢だろう！？」

「ご、ご主人……様、頭に蛆か何か湧いちゃった……の？」

そう言いながら渋々と専用のバトルフィールドに一足先に入って武器の状態を確認する。

まずはリボルバー。こちらはジャムが絶対に起こらない構造なので、あまり心配しなくてもいいと思う。

ガガガガガウン……

派手な音と共に銃弾は吸い込まれるようにして目標のバリケードへと吸い込まれていった。

なんだったか、こういうのは皆中とでもいうのだろうか。……違
うか。

特に問題も無い。標準的な……って待て。標準的だと？ なぜ標
準的だと分かるんだ。俺はこっちに来て、武器を触ったのは初めて
だし、もとより拳銃など触れたことも無い。ただ、わかるのだ。体
に染み付いたとでもいうべきだろうか、よく馴染む。

こっちのジャマダハルにしてもそうだ。流れるようにマガジンの
装填からコッキング、そしてセレクトターの操作。自然に構え、最も
反動を御し易い姿勢で射撃を始める。

この銃には3点バーストなど付いていないので、指切りしか方法
が無い。しかし俺は正確に3発ずつ刻んでいく。まるで熟練した兵
士のような。

30発の弾倉を丸ごと撃ちつくすと、俺はフィールドから出た。

「ね、ね！ どうだった？」

早速ご主人が俺に感想を求める。

「悪くはない。特に問題も無く使いこなせそうだ。ただ、早いこ
ろ専用装備が欲しいところだな」

顔を上げてご主人を見上げると、何故か怒った顔をしていた。何
でだ。

「言葉遣い！ 直さないとだめだよ？ 今のマスターは僕なんだか
ら！」

俺はがつくりと膝を付いた。そうだった……。そういう約束だったな……。だめだ、細胞レベルで拒絶しているからか、油断するとすぐにもとの口調に戻ってしまう。

「えーと、その……ご、ごめんなさい。次からはしっかり気をつけるから……」

それで今のところは納得したのか、気をつけてね？ と念を押さ
れただけで済んだ。よかった……。

5th Ride (後書き)

うーん……調子が出ない……。

感想とか評価をいただけるとハアハアしながら奴隷のように書きま
すとも！

6th Ride (前書き)

ようやくお届け、第六話です。

「ご主人」と呼ぶことには抵抗がないくせに、「ご主人様」と呼ぶのは未だ慣れていないユカリちゃん。微妙な乙女心です。

あ、あと残念な挿絵付です。なんていうか……ごめんなさい。

6th Ride

俺は手鏡をしげしげと見つめていた。これが……今の俺。薄柿色^{うすがき}の髪の毛から突き出でたる双角は見事な朱色。健康的な薄ピンクの肌に、瞳は良く映える朱の色^{あけ}をしている。

ボディは紅と黒^{あか}が絡み合い、攻撃的なラインを作り出している。くるりとその場で一回転すると、大きくまとめたサイドテールが綺麗に揺れた。

> i 2 5 2 7 5 — 2 6 5 6 <

「あ、いいね！ 今の女の子っぽい！」

その場で俺は落ち込んだ。

鏡の前で崩れ落ちている俺に、さらに追い討ちをかけるかのような影が迫った。ご主人だ……。それはもう、本当に嬉しそうな満面の笑みで俺を見ている。

俺はもう、それを見ているだけで大体何させられるのかを感じ取った。

俺の口からは、怒涛の勢いで拒絶の言葉があふれ出る。

「いや、無理無理無理無理！ バトルとか無理！　せめてリアパーツを！」

そう言っただけで俺専用のリアパーツを見やるが、それに限らず専用武装は軒並み閉店状態だった。仕方ないので、せめて剣だけは欲しいとM8ライトセイバーを2本借り受けた。

しかしそれだけだと常時展開していかないといけないから、鞘を作ってもらったことにした。参考にしたのは某ストライフの漫画。背面に安定するように装備すると、リボルバーとジャマダハルも装備した。ジャマダハルには無理を言っただけで単発式グレネードランチャーを付けて貰った。ちなみにリボルバーは元からホルスターがあつた。

「しかし……こんな装備で勝てるのか……」

「女・の・子！」

ダメ出しを食らった。

「ご、ごめんね、ご主人様……？」

「うん！　よしよし、それじゃご褒美に、胸部アーマーとレッグシールドをプレゼントだよ」

屈辱ッ！

「それで、お……私の対戦相手って、誰だ……誰なの？」

「うふふ、それはこの私です！」

俺の目の前にやたらと気位が高そうな、薄紫色の髪をした神姫が飛び降りてきた。

俺が相手のデータを思い出そうとする前に、勝手に俺の中で相手神姫のデータが呼び出されていく。

ヴァイオリン型MMS紗羅檀。主に音響系の武器を使用している場合が多い。遠距離線を主眼に運用されるのが常。しかし近接にしても、長刀とナイフを使い分けてくるため死角は少ない。

なんだ……これは……頭の中で戦い方がシミュレートされていく……。こんな風に戦闘を進めればいいのか？ そうすれば俺は勝てるのか？

「俺の神姫で、名前は『ミリス』っていうんだ。よろしくな！」

鈴木がご主人のことをニヤリと見遣る。

それを尻目に俺は戸惑いながら、装備を手にバトルステージに入っていく。

「がんばれ、ユカリ！ 負けないでね！」

負けたら……どうなるんだろう、俺。

寒気がする中、姫沢部長の声によってバトルが始まった――

長期戦は確実に不利。ゆえに短期決戦しかない。

バトル経験の少ない俺は長期戦になるほど体力（今の俺にあるとすればだが）を消耗してしまう。その上俺の手が読まれやすくなる危険がある。戦闘での駆け引きというのに全く不慣れな俺は、どうにかこの差を埋めねばならない。

どうにかできるとしたら、機動力だろう。俺はハンドガンを抜くと6発をほぼタイムラグなしで撃ち込みつつ、障害物の中へと駆け込んだ。バリケード戦でしか俺の機動力は発揮できない。正面からの撃ち合いには圧倒的に火力が足り無すぎる。

パツと見たところ、相手はアイゼンイーゲルを装備していたように思う。おそらく障害物を破壊しながら制圧する戦法だろう。ほら、破砕音が聞こえてきた。

そうになると、逆に中央広場は手透きになる。俺は中央広場を一気に横断して相手の背面を取る作戦に出た。

しかし、敵をこちらに引きつけておかなければならない。相手も馬鹿じゃないだろうから、背後も警戒するだろう。そこで生きてくるのが単発式グレネードランチャーだ。

少々危険な作戦だが、恐らくこれが成功すれば大なり小なりダメージが行くはず。大ならよし、小なら警戒しだしたところをゲリラ戦法で徹底的に引っ掻き回してやるまでだ。

考えている間にもジャマダハルで3点バーストを使い応射し、常に応戦の意思があることを確認させ続ける。

俺は仰角で単発式グレネードランチャーを放ち、弾切れになったジャマダハルを投げ捨てた。それと同時に、もう走り出している。

リアパーツも無いから推進に加速できるものなど何も無い。スラストなど付いていないから急制動をかけることもできない。頼れるのは、この両の足だけ。

視界が溶けていく。あの目標まであと少し。

だったんだ。そのときは。

ガガガガッ　　っという激しい銃撃音と共に足元が弾ける。

「そんな程度の陽動で目を濁らせるほど、私の瞳はビー玉じゃないつもりですけど?」

ミリスのアイゼンイーゲルは俺をまっすぐに捕らえていた。

やはり素人考えたっただけ……。しかし、やばい。圧倒的に、不利。近くに遮蔽物があるとはいえ、一息で飛び込むのは不可能。しかも飛び込んだところでそれごと銃撃されれば一巻の終わりだ。

考える……。絶対に何か手はあるはず……。

相手の動きに集中して……。

——システ……起……——

何かが、見えた気がした。

俺は、動かなかった。動けなかったわけではない。中らないと判ったのだ。相手の視線、性格、銃口、トリガー……。全てが遅い流れの中で、見えたのだ。そして直感した。これは、中らないと。

事実、俺が隠れようかと考えていた障害物が消し飛んだだけで、銃弾は流れ弾にしても飛んでくることは無かった。

「あらあら……恐怖のあまり動けなかったんですか？ まあ、仕方ありませんよね、ガトリングで狙われれば……。私とてヒヤリとしますし」

言わせておけばいい。俺は今、最高にイイ気分なんだ。脳内にあらゆる情報があふれかえる。それを俺は冷静に超スピードで並列処理していく。

暑い……でも、冷たい……。

思考が加速する。俺は、ユカリで、ユカリは私。

ドクンと、何かが奮えた気がした。

そして、全てが繋がった。

——システム・デイルージュ、起動——

私は前方に飛び出していた。一瞬で距離を詰め、右前方へと飛び込んで銃撃を回避。そのまま銃身を思いっきり蹴り飛ばしてやる。するとそれは綺麗にミールリスの手から離れ、全壊判定が下った。

私は止まらない。M8ライトセイバーを展開すると同時に突き出し、リアパーツごと串刺しにして破壊する。

もう既に用は済んだとばかりに、私は三角跳びの要領で障害物の間を駆け上がり、障害物の間に身を潜めた。しかし私の後姿はしっかり捕らえられていたようだ。今度はアルヴオPDW9を構えたミールリスが障害物の陰から現れる。私は横っ飛びにそれをかわして、障害物から障害物へと駆け抜けた。

弾切れを誘発するために姿を現しては物陰に飛び込むという行動パターンを続ける。第一、私には遠距離武器など無いんだもの、撃ち合いなんてできるわけが無い。

リアパーツが無い私は、壁を蹴って移動することで無理やり三次

元的な機動を獲得している。だから、足場が破壊されてしまえば近づくことすらままならないのに……。未だ解決策は見えない。

一体いつになったらミールスのSMGは弾切れを起こすの！？
さつきからずっと撃ちっぱなしじゃない！

私は悲鳴を上げそうになりながら回避を続けるが、もう限界だった。集中力が切れ、足がすべる。

たった一瞬姿勢を崩しただけだった。しかしそれは永遠にも等しい隙。ミールスは満面の笑みで私に銃口を向けて――

ガキンッ

鋭い金属の音と共にホルドオープンしたまま、銃弾はいつまで経っても出なかった。

「「弾切れっ！？」「」

お互いが認識すると同時に剣を展開し、同時に呐喊する。

「っ、！ いい加減に、負けを認めたらどうですか！？」

神経を研ぎ澄ましている私にとって、会話できるほどの余裕は無い。反射的に返事をするだけだ。

「そっち……こそ！」

ミールスは右手にボウソード：ノートウング、そして左手にはボウナイフ：リジルを構えて向かってくる。対する私はM8ライトセ

イバーが一振り。

私は剣道の形三段目の「突き」をそのまま再現した。地を這うような剣先は燕の如くその身を跳ね上げる。

相手の形など関係ない。不可避の切っ先が確実に喉元を抉る……が、神姫の反応速度ならばそれすらも対処が可能だ。ボウナイフ：リジルの剣腹を使って紙一重、防がれた。

しかしそれすらも想定範囲内。体の勢いは殺さずに手の内でM8ライトセイバーを逆手に握り返すと、相手の右足元に潜り込んだ。

そこは既に敵の死角。間合いを潰されては何もできない。

私はM8ライトセイバーを振った――

「いやー、すごかったね！ ユカリいい娘いい娘」

「頭をなでる……ないでよ！ 別にお……私は勝とうと思って戦ったわけじゃないんだから！ あくまで慣らしだから、そんな褒めら

れることじゃ……」

それにしても、あの感覚は何だったんだろうか。しつこく頭をなで続けるご主人を避けながら、俺はそれのことだけを考え続けていた。

6th Ride（後書き）

みなさん、温かな感想をありがとうございます。

連載三本を平均して更新していこうと考えていますので多少ペースが遅くなるかもしれませんが、しっかり一話一話考えて書き込んでいこうと思います。

特に二次創作は設定等をよく考慮しなければならないので、「ありうる可能性の1つ」としての武装神姫SSになればいいな、と思っています。

これからがんばっていきますので、応援していただけると嬉しいです！

7th Ride (前書き)

遅くなりましてすみません。ストラーフ愛でたりストラーフ愛でたり二人目をお迎えしたりしていたらいつの間にか遅くなってしまっていました。

…… 申し訳ありません。

訂正ですが、舞台設定を 2040年↓2042年 とします。発売神姫の時系列的におかしくなってしまうので……。

7th Ride

「ご主人様っ！ 武装がっ！ 武器が足りないよ！」

俺は目の前でのもぐりとお茶を飲んでいるご主人に怒鳴った。
しかしそれもどこ吹く風、ご主人の野郎はズズ……とまた一口お茶をすすただけだった。

「てか、そんなに枯れてつとマジでジジくせえぞ！ いいから武器と防具を！ 俺を“武装神姫”にしてくれ！」

「……言葉遣い」

「ごめんなさいっ！」

俺は一瞬で平伏する妙技を身に付けた。

あのあと部活動は終了ということになり、今はご主人の家、結城宅にいる。お世話になってる、なんて絶対に言わない。

「ねーねーご主人様ー。武装をー。できればストライフmk2ラヴィーナの武装をー。漢ならッ！ パ・イ・ルツバンカアアアアッ！…そしてあの長刀……ああ、シビレるっ」

「……仕草」

「ごめんなさいっ!」

2度目の土下座。ああ、慣れたものさ。

クソッ、四六時中女らしい事してたらいくらSAN値があつたつて足りやしねえ……。

「ご、ご主人様あ……。お願い! 武装が欲しいの……」

あゝあゝあゝあゝ!

「そうだね……。バトルするんだもんね。今のユカリのLPライフっていくつだっけ?」

そう言つてクレイドルから接続された俺のステータスをチェックするご主人。しばらくカタカタとPCをいじっていたが、何やら額に冷や汗を浮かべて俺を見た。

「LP……。250……。?」

俺もご主人も、しばらく動けなかった。

「250……。?」

俺が問いかける。

「250……」

ご主人も答える。

残る呼気を全部主張に込めてみた。

一般的な神姫の初期LPは400前後である。市販品の中で最も低いと言われているHMT型イーダでさえ300近くはあるのだ。市販品と比べて、群を抜いて低いと言える。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

$$\begin{matrix} L \\ P \\ \vdots \\ D \end{matrix}$$

S
P
:
:
D

$$\begin{matrix} A \\ T \\ K \\ \vdots \\ C \end{matrix}$$

DEF: D

DEXTS

S
P
D
:
S

EST:
C

センサ + 2

$$\vdots$$

- - - - -

「誰だこんなにピーキーに設定した馬鹿はア！」

俺は思わずクレイドルをブン殴っていた。

ご主人もうつむいている。

「新しい神姫……迎えようかな」

「まアアアてエエエエい！ そうなったらどうなるんだ！？ オ
…私は！？ 私はどうなるん…どうなるの！？」

「いや、態度治らないし」

「ごめんなさアーいッ！！！」

……本日、3回目の土下座。俺は一体どこまで土下座を極められ
るのだろうか。

「ほら、ご主人様？ オンリーワンの機体で優勝したらカッコイイ
ですよ？ ね、だから私と一緒に優勝しましょう！ ね？」

そう言ってご主人の方を見たら……もの凄く“イイ”笑顔で俺を
見ていた。

その迫力に2、3歩下がって尋ねる。

「ご、ご主人……様？」

開いたご主人の口は悪魔か何かのように、血の滴る三日月の形をしていた。

「今、言ったね？　優勝するって。ユカリは本当にイイ娘だね。ちゃんと自分からバトルに参加してくれるなんて」

む。ご主人は何か勘違いしている。俺は別にバトルが嫌いなわけではない。むしろ、神姫となったからにはやってみたいのだ。きつとライドシステムといっても風を感じたり、敵を討つ快感を直に感じられるわけじゃないんだろ。だからせっかくだし、どんどん戦いたいというのはある。

しかし、しかしだ。

拳で戦ったら、簡単に手首とか肘関節がイカれるに決まってるだろ！　アーマー無かったらＣＳＣが傷ついて俺が死ぬかもしれない。そんな状態でバトルできるか！　……　というのを女の子の言葉で丁寧に説明した。

「確かにね。うん、手元には……神姫を迎えるために準備していた8万があるから、それで何か買いに行こう。よし、明日は休日だから、デートだね!」

「デートじゃねえええええ！！！」

翌日、部長と鈴木がご主人にひつついてきた。

「ごめんね、ユカリ。せっかく2人きりのデートって思ったんだけど」

ど、よく考えたら詳しい人がいるといいからね」

また面倒な……。きつとこいつらは神姫に対する^{うんちく}蒞蓄ばかり語って、余計にご主人を混乱させるだけなんだ。

……待て、今のは別にご主人をかばったわけじゃない。うまいこと無知なご主人を誘導できなくなったただけだ。ご主人が騙されたらどうしようとか、そういったあれじゃない。ないったらない。

俺がご主人の胸ポケットの中でアウアウと混乱していると、どうやら目的の店にいたようだった。

「ここかあ、凄いですね！ どこ見ても神姫だらけ……。ここなら何時間でもいられますね！」

「でしょ？　ここらへんでは最大級の店だからね」

これが……。未来の神姫ショップ……。すごい！　桃源郷だ！　くっそう、こんな身ではオーナーにはなれない……。それが悔しい！　が、エアリアルパーツで戦うのも何だか燃えてくるものがあるぜ！　俺が1人テンションを上げまくっていると、武器コーナーの試用台に下ろされた。

「なんぞ？」

「いや、お金も結構あるし、早速武器を選んでもらおうかと思ってさ」

「ご主人はそう言うと、1挺のスナイパーライフル……。いや、これは対物ライフルか？　とにかく、随分安そうな作りをしたものを俺に渡した。」

「コレちやつちいね……。本当に実戦にもつの？ ご主人様」

そう言ったら頭をかきながらご主人はその銃をヒョイツと取り上げた。

「やつぱりそうかあ、わかつちやう？」

「わからいでか」

また別な武器を物色しながらご主人は弁解するような口ぶりで自分のチョイスを覆い隠す。

「いやさ、それ¥3,980で安かったからどんなものかって思っただけど、やつぱり純正の方がいいかな……」

すると後ろから、店に入った直後に別れたきりだった鈴木が顔をのぞかせた。

「最初は純正にしとけー。ってか、ここのコーナーよりもセットパーツを一式買ったほうがいいぞ？ 運用思想が統一されてるから、やりやすいと思うし」

そう言つと、俺たちをシリーズ武器のところまで案内してくれた。

「防具も入ってるからな。ここらへんから選ぶといいよ。俺としてはそうだなあ……。アルトアイネスなんかいいんじゃないか？」

ご主人はアルトアイネスのパッケージを見つめて――

「これに決め」

「決めるなっ！」

いそいで俺は遮った。

「オ…私の戦闘適性はインファイトシューターでしょ！？ だったら素直にアーンヴァルとかウェスペリオーとか選んでおけばいいのに！」

「ご主人もそうだったね、と俺のステータスを思い出しているようだ。」

「うーん、今後のことも考えると、費用は抑え目にウェスペリオーにしとくべきだね。それに追加で補助ブースターと拳銃か小剣か…ってチョイスじゃないかな？」

脇で見ていた部長も俺のアイデアに賛成を送ってくれる。

「なら、当面のパーツはウェスペリオーマインで行こうと思います。追加ブースターは…バラ売りのウェス子パーツで。あとは…小剣“ハダル”でどうかな？」

……本音としては、ストラーフmk2型の装備が欲しいところだけれど。かっこいいんだよなあ、アレ。

結局ウェス子装備+αを買って今日は解散ということになった。

「ようやくっ！ オっ……私にも武装が！ これで空が飛べるよ、この空をッ！」

俺は家についてからというものの楽しみで、辺りを踊り歩いていた。

「空をッ！ 飛ぶのッ！ デス！」

ポーズをつけて、ビシッとご主人を指さす。

> i 2 7 7 4 3 — 2 6 5 6 <

「そうだね、僕も楽しみだよ……でも。その前にクレイドルで充電ね。もう残量少ないでしょ？」

ギク。今日は調子に乗って動き回ったからなあ……。

チクシヨウ、ならば明日こそ！

……こんなに興奮して明日を楽しみにするなんて、いったい何年ぶりだろうか。童心を取り戻したかのような気分の今、少しは神とやらに感謝してもいいかもしれないと思った。

7th Ride (後書き)

Skype使って知り合いに「挿絵描いて」って言ったら、30分で返ってきました。パネエ。

最近にはじファンさんの方でも武装神姫二次創作が増えてきたようで、嬉しいです！

コラボとか出来たら面白いかも！

……締切守れる自信ねえけど。

8th Ride (前書き)

久しぶりの更新です。楽しみにしてくださっていた皆さん、すみません。

色々あったんです……。詳しくは7/15あたりの活動報告を読んでいたけるとわかります。

リハビリも兼ねているので多少文章が崩壊していますが、どうか目をつぶっていただけると幸いです……。

8th Ride

ご主人のポケットの中。俺は、強制シャットダウンされていた。
——というもの。

自宅にて。

「ねーねーご主人様聞いてよ聞いてよ!」

「な、何? ユカリ……」

俺はその場でクルリと1回転すると、買い物袋を指差した。

「フライングユニットなのだ！」

「……うん、知ってるからね？」

俺はわかってないな」と肩をすくめ、首を数度横に振った。

買ってきた袋からパッケージを出して、危うげなくそれを持ち上げると、そのままクルクルと踊りだした。

「あつ、ちよつ！ 危ないよ！」

「これがッ！ おどらずにッ！ いられるかアアアアアア！！」

フウッ、と息をつき得意げにご主人を見上げると、見たこともない形相のご主人が立っていた。

俺は額を机の天板にこすり付けていた。

キユウウン！

「Set up・Checking all device・
……All systems GO・ユカリ、再起動リブートします」

見知らぬ天井だ。

規則的な天井の梁に、石膏ボードのようなプレート。……学校じゃないか。

そして俺は、クラス中の生徒に囲まれていた。

「……なんぞ？」

俺が上半身を起こしたら、俺は女の子の手の中に移っていた。

……事情を説明してもらおうか、ご主人。

「かわいいー！」

「ゆかりちゃん？ ゆかりちゃん！」

「私も欲しいなあ……」

あまりの重圧に、うあー！ となった。つまりは見世物パンダだろう！？ そもそも神姫なんて見慣れて……って意外と高額だからそつでもないので？

とにかく俺を握りしめる女子生徒の中で、暴れわめいた。

「それはダメ！ ギュツと握っちゃダメ！ 『みぎいつ』ってなる！ ご主人様っ！ ご主人様はいずこ！？」

救出されたのは担任が教室に入ってきてからだった。

そのままの流れで、俺はご主人の胸ポケットに入っただけ、高校の授業を受けていた。本当はカバンに入っていないとはならないらしいが、そんな窮屈なところにいられるか。かといって離れるには危険が多い。小さい体というのは意外と恐怖心が大きくなるもので。

そんなわけで、俺もボーっと例題を眺めていた。

「ご主人様ってバカなの？ 常に脳みそがミキサー状態なんですよ？ オ……ワタシにだって分かるのに」

「な、なんで神姫が……ユカリが分かるの！？」

まあそりゃあ、曲がりなりにも大学生やってましたから……。高校一年レベルだったらわからなくはないさ。

「ほら、『何が起こつたんだ！？』は英訳すると『What's the f%kin' shit on me!？』じゃないの？ で、こつちの『ちゃんと運転してください』は『Did you bought your license!？』でしょ？ 『彼女は私の親友です』。これは『She is my bitch』ねー」

「本当に合ってるのかなあ、これ……」

「結城君。では、例題を英訳してください」

早速指名されたようなので、俺は得意げにご主人を見た。自信満々とは正にこのこと。

「えーと……」

英語の先生（外国人）の悲鳴がこだました。

放課後。俺とご主人は部室に向かっていた。

「ユカリ……。合ってるんだけどね？ 合ってはいたんだけどね？」

「ならいいじゃない」

「授業初日から目をつけられたよ！？」

目立つのは基本的にいいことだ。俺もご主人がパンキッシュでアーキズム的なアヴァンギャルディストだと鼻が高い。

「せめてもの恩返し……受け取って♪」

内心、爆笑。確信犯（↑誤用）的な俺。

とにかく、俺は早く空を飛びたいのだ。翼が4枚とかロマン過ぎる。部室の扉をくぐる時にはもう、「早く出して！」とポカポカご主人を叩いていた。

「こんにちは！」

ご主人も張り切っているんだろう。無理やり衝動を堪えたような挨拶だ、不恰好だぞご主人。……でも、何もワクワクしているのは俺ばかりじゃないということだ。

中にいた部長と鈴木がそれに応じて挨拶を返す。それを聞きながら、さっそくとばかりにカバンからウェスペリオ型の武装セット——本体は無い——を取り出した。

「おお！」

パッケージを開けて武装のセッティングを始めようとした。そこで俺は待ったの声をかけた。

「セッティングやる！ オ……わたしがやる！ クレイドルに接続してー！」

ご主人は渋々といった感じで、「まあ、ユカリなら……」とか言いながらクレイドルの準備をした。ごちゃごちゃ言わんと、最初っからそうしていればいいのよ！

俺はセットアップ用のディスクをノートPCに放り込むと、勢いよくクレイドルに座り込んでセッティングを開始した。

できる、とわかったのだ。どうしてとか、理屈じゃない。ウィングの開閉速度から噴射口の調節、武器レスポンスの調整、あらゆる項目が俺の脳内で広がり、処理されては消えていく。イメージ的には、多重立体型HUD（Head-Up Display）だろう。

俺は「終わった!」と叫ぶと、ご主人に接続を要求した。こればかりは自分ひとりじゃできない。

そこで、部長たちが固まっているのに気付いた。

「ユカリ……ちゃん? どうしてできるの、そんなこと。普通クレイドルから神姫が数値設定をしたって話は聞かないよ?」

何!?

「できるものはできるんだから、しょうがない……でしょ!」

俺は初めて知ったことにびくびくしながら、自分の中身は人間だからなあとか考えていた。

部の2人は自作機だからかなあ……? とか相談していた。廃棄処分とか……ないよね?

俺は机の端に立っていた。下にはマットが敷いてある。背中には丸ごと巨大スラスターと化した“テュフォン(以後スラスター)”。これで機動力を得る。そして翼基部のブースターで基本的な推進力を得る。そして“ヴェルテクス”をもう一個ばら売りしていた“テュフォン”に接続、“ヴェントス”を引き金として背面に直接接続された巨大ライフル2挺とした。ミサイルポッド“ニンブス”も“

テュフォン”上部に接続し、あらゆる角度から撃てるようにしてある。

近接武装は鉤爪状の“カルクス”を両腕に装備している。まあ、おまけみたいなものだ。基本的に遠距離から戦う俺は、最初は近接武器なんぞ要らんわ！と言っていたが、次第に不安になってきた。それでとりあえずの接続をしたのだ。

そして今。飛翔の時ッ！

「忍法ッ！ アイキャンフラインザスカイオブザワールドひゃっほーっ！」

「忍法！？」

俺はご主人を無視して飛び出した。

すごいスピードだ！ これは限界まで出したらだれも追えないんじゃないだろうか。2枚目の翼を展開、滑空に入る。

空気が流れていく。足元には何もないにもかかわらず、俺は今…
…今！

すばらしい。飛ぶとはこういうことだったのか。何物からも解放された、極限までの自由！

俺は背面からヴェルテクスを展開、トリガーを握り、滑空状態で部屋を飛び回りながら机の上にあった用のボール紙を狙い撃つ。俺の脳内には両の角から送られた情報がHUDとして展開されている。

ティティティ……、という音とともにすべてをロックオン、5つとも2秒もかからずに沈めた。その後、ホバリング体勢で空中に制止した。

どうだご主人！　すごいだろ！

8th Ride（後書き）

どうでしたでしょうか？

皆さんの感想お待ちしております。

結構それが活力の元になったりして。

あ、あと感想欄で募集します。神姫の。

どの神姫を出してほしい！ とかいうのがありましたら一筆したためてくださると嬉しいです。

あ、ついでにマスターと神姫の名前とかも一緒に考えてくださるとそのキャラを使わせていただいたりします。ご自身のH・N・でもいいですよ！

もちろん、神姫だけでも結構ですので！

武装紳士・淑女の皆さんも一緒にこの小説を盛り上げてくださるとうれしいです！

9th Ride (前書き)

今回はコラボの都合もあり、早めの投稿です。

って、バトルは!?

9th Ride

俺が空中でポーズを決めた時だった。二人の闖入者によって扉が押しのけられたのは。

「こんにちは、みなさん」

「こんちわッス！」

片方はタレ目とロングヘアが特徴の、優しそうな……先輩だ。襟章からして、間違いない。胸でかいな、くそ、俺だって……って違い！俺は無くていいの！いや、あるけど……。

不毛だ、やめよう。

まるで使い切った絵の具チューブみたいな溜息を吐いてから、スィーッと空中を滑空してご主人の頭の上に着地する。

もう一人の、特徴的な語尾の娘をじーっと見つめてみる。ボブカットが活動的な印象を与える、背の低めな娘だ。小さいころは男の子と間違えられたんじゃないかというほど、雰囲気、こっ、なんというか……異性を感じさせない。きつといい友達になれるだろう。

ご主人がな！

はあ、とひとつため息をつく、ご主人の頭を小突いた。

「ほれ、挨拶だ……挨拶しなきゃダメでしょ？」

あ、うん、とご主人が返事するより早く、ボブカットの娘が話しかけてきた。

「1年生ツスか！ おお！ 待望の同学年がついに！」

テンション高え……。外見を裏切らない君の性格に乾杯。

「私、武藤^{むとう} 鈴莉^{りんり}って言います！ 神姫はアルトレーネの『エンネ』ツス。神姫共々よろしくツス！」

鈴莉？ へえ、よく似合ってるじゃないか。

俺はそんなことを考えながらご主人の自己紹介を聞き流していた。

「次は私の番ね。私の名前は日乃元^{ひのもと} 灯^{あかり}。3年で、副部長をしているわ。で、パートナーは『サファイ』よ」

そう言った後カバンの専用ケースから出てきたのは、騎士型のサイフォスだった。起動するとサファイは見事な一礼をし、マスターの傍で直立不動の体勢をとった。

「そういえば、結城君の神姫って何ツスか？ ウェスペリオアの装備っすけど」

「そうね、私も見たことがないわ」

2人が口々に疑問を吐き出す。それはそうだろう。この世に2人
オリジナルとない、唯一の機体。その名も――

「赤鬼型ディルージュ。それが、ワタシさ」

「うん、ユカリっていうんだ、かわいいでしょ？」

（そっちなのか！？）

俺はそう心の中で叫ぶと、二度空に舞い上がった。
ふたたび

灯ねえ……。そうか。いいや、アダ名を考えるのも面倒だし。灯
って呼ぼう。

自己紹介は済んだかい？ と部長が近づいてくる。

「あれ？ 滝乃さんは？」

聞かれた灯は、困ったような顔をしながら自分の両手を組んだ。

「いくら仲良しだからって、いつも一緒にいるわけじゃないわよお」

「あはは、そうだね。で、何か用事？」

「うん、よく知らないけれど……」

部長たちがそんな話をしているのを見ると、鈴莉が鈴木に…
あーもう、裕明！
ひろあき鈴木って結構よくいるから裕明でいいや。と

にかく、裕明に挨拶をしてこちらに向かってきた。お目当てはやはり――

「かつこいいッスその神姫！ みしてもらって良いっすか？」

「うん、いいよ。あと、別に敬語じゃなくてもいいよ。僕たち同級生なわけだし」

鈴莉は頭をかきながらアハハー、と笑った。

「こついう口癖で、どうにも治らないッスよ。ま、キャラ付けだとも思っただけッス」

キャラかよ。自然と作り上げたキャラ……なかなか手ごわいぞ、こいつは。

……何がだか。

俺はご主人にパーツを外してもらおうと鈴莉に近寄った。

「先に言っておくけど、『みぎい』って握っちゃだめだからね！」

「あはは、どこの鬼畜ッスか、それ」

そう言っただけで俺を持ち上げ、くまなく観察する。何だか恥ずかしい。巨人の女子高生の掌の上でじろじろと見られる……なんだか妙なシチュエーションだよ……。変な方向に目覚めてしまいそうだ。いやいや、特殊すぎるだろ、考え直せ。

「オリジナル神姫……凄いッスね！ 人は見かけによらないもんッ

スね！」

「……『悪意が無いということは、時として最大の悪意となりうる』」

「

「ユカリ、フォローありがとう……」

その空気で気付いたのだろう。地雷を踏んでしまったと。

「す、すまなかったツス！ 私、てっきり結城君が作ったものと……」

俺は溜息をひとつつくと、話し始めた。俺がご主人の物置から見つけたこと。前のオーナーの記憶や記録が無いこと、主武装が壊れていること、そして超ピーキーな性能のこと。

それを聞いたら、鈴莉はひょいと顔を上げた。

「それなら、私に顔馴染みの神姫関係のスタッフがいるツス。掛け合ってみるツスか？」

ご主人は、迷わなかった。

迷わずに首を横に振った。

「ユカリは、僕の神姫だ。だから、修理も僕が勉強して直してあげなきゃいけない。それが僕のオーナーとしての責務ってもんでしょ？」

そうか。お前が直してくれるのか、俺の装備を。なら、待つさ。

何年かかろうが直してくれよ。

「なら、早くしてくれよ。直る前に優勝したっていうんじゃない、ちょっと華が無いじゃない？」

それを見て、鈴莉も笑顔になった。

「言ってくれるね、ユカリ」

「私も忘れないでほしいッス。私だって頂上を目指すならライバルの1人ッスよ！」

お互いにそう言ってニヤリと笑みを交わしたときだった。部長が今日の活動を発表したのは。

「今日は、外に出ようか」

「……？ どういうことです？」

「神姫センターで、バトルしに行こうってことだよ」

9th Ride (後書き)

次回も早めの投稿になるといいな……。

9/6まで沖縄に強制連行されてるんで、ね。

あ、まだキャラ募集はしています。今なら大会にライバルとして出てくるかも!?

10th Ride

「神姫センターで、バトルしに行こうってことだよ」

神姫センターで……バトル！ おお、これは燃える展開じゃないか！

俺はご主人の顔の前でホバリングすると、ご主人の前髪を思いっきり引っ張りながら叫んだ。

「バトル！ 対外戦！ 安心して、初心者ご主人様！ この俺……ワタシが出る以上、勝確だから！」

ブチブチつと聞こえた気もするが気のせいだ！この空戦装備さえあればなんだって出来る気がする。さあご主人、早く装備を外せ。出陣の準備だ！

怒れるご主人を前に、平身低頭しながら俺は意気込んだ。

再びご主人の胸ポケットの中。そしてご主人は電車の中。神姫センター目指して移動中である。

結局向かうメンバーは、ご主人、部長、灯、裕明、そして鈴莉の5人だった。加賀は何やっているのか、おそらく兼部先だろうと裕明が言っていた。

「そっいえば」

裕明が話題を変えた。

「今夏に発売される、ジールベルン・Aってどうなんですか？ 個人的には軽装なところがツボなんですけど」

問われた部長が、苦笑いを浮かべながら返す。

「カタログスペックすらこの発売直前で公表されていないのに分かるわけないでしょ？」

裕明は「そうっすよねー」と言っただけで雑誌を取り出した。

「まあ結局は、きっとオールベルンやジールベルンのプロトと同じような性能なんだろうけどねー」

「せ、先輩。それは言わない約束ッス……。ってか色々問題発言！」

裕明が黒化した部長を止めに入った。

「鈴木先輩……キャラが被るッス！ 今すぐキャラ変更をしないと

……しないと……アイデンティティ・クライシスツ！？」

鈴莉も楽しそうで何より。というか、実は鈴莉の方がマスター歴が長い。中学の頃からやっていたらしいし、模型屋主催の小さな大会でも上位に食い込んだこともあるらしい。

軽薄そうに見えて、実は相当手ごわい相手じゃないだろうか。俺はそう思い、ご主人を見上げた。

「ん？ どうしたの、ユカリ？」

「んーん。なんでもない。なんでも」

大丈夫。マスター歴^{……}たった3日のご主人でもきつと何とかなるはず。一応俺も元は人間だったんだ。そこらの神姫に判断力で負ける気は無い。

そう。神姫バトルは3つに分かれている。まず『リアルバトル』。実際にこれは神姫同士が生身でぶつかり合うリアルファイトだ。当然CSCが破壊されて事実上の“死亡”となる神姫も存在する。

しかしある程度の武装紳士協定はあって、『過度に致命的部位への攻撃は仕掛けない』などの配慮はある。

ちなみに、予算の足りない大半の高校の神姫研究会はリアルバトルでレベルアップを図っている。そのため同好会・研究会上がりのマスターは自分でのリペアスキルが相当高いのもまた事実。

次は『バトルロンド』。これは神姫自身は戦わず、筐体でバトルの神姫同士が戦うのを観戦するバトルだ。神姫が傷つかずにバ

トルできる上に、オンライン筐体につながれば全世界のマスターとバトルできることから、これが一番人気が高い。ちなみに、公式戦も大体がコレで行われている。

ただし、オリジナル武装の登録には何度か神姫センターに行き、審査・認定・登録・スペックの公表をするなどのデメリットが多い。

そしてもう1つがここ1年程で急に普及した「神姫ライドシステム」という、神姫をマスター自身が実際に操作して戦うバトルがある。それが『バトルマスターズ』だ。

しかしいくら操作すると言っても、行動の主導権は神姫の方にあるので、残念ながら神姫との親密度が低いと思うように操作できなかったり、レスポンスが悪かったりする。それに神姫の特性を理解し、大量の情報を処理しながら戦わなければならないので、1段階レベルの高いバトルと言えるだろう。

神姫センターに着いた研究会一行は早速空きの筐体を探し始めた。すると上手い具合に一台空いたので、まずは挑戦とばかりにバトルロンドに俺は挑むことになった。

相手は……？

「ありや、また挑戦者が現れたか」

「マスター、マスターのパンク精神のおかげで、連日連戦連勝です

「！」

おいおい、何だか濃いキャラだな……。初戦からこんなのに当たるとは……。いやさ、確かに神姫マスターはキャラが濃いのは認めるよ。でも、さあ……。

ウチの研究会、実は真人間ばかりなんじゃ！？

「結城って言います。あ、これ苗字です。初めてのバトルで緊張していますが、どうぞよろしくお願いしますね」

「おうよ、俺の名前は張野良助だ。ハリーと呼んでくれ。こいつはアーンヴァルmk2のヴーナ。それにしても、初めてで大会ランカーの俺と当たるなんて、お前もファッキンついてないぜ」

「ええ、マスター。では、よろしくお願いしますね、ファッキンシット！」

キャラ付けなのはわかる。分かるけどさあ……。あんまり自分の神姫に変なこと教え込むじゃねえよ……。

そんなことを俺が考えているうちに、武装のセッティングが終わったようだ。ご主人が俺を筐体に送り込むエレベーターに配置する。

それはまるで神聖な儀式のよう。俺は先日の戦い以来、意識すると見えるようになったHUDを展開、セッティングを開始する。

「それじゃ、」

「まって、ご主人様。私に一言だけ言わせて」

「ご主人が首をかしげる。が、俺は無視してセッティングを完了させる」と、叫んだ。

「Are you kiddin' me !？」

目を開けると、何も無いバーチャル空間。しかし設定したとおり、障害物が地面から伸びていき、テクスチャが張られていく。そよぐ風に揺れる花。ここは、まるで本物の戦場……。

ステージは廃神殿。こういう風景は好きだ。風化した柱が倒れ、海を臨む平地。隠れ場は殆ど無い。しかし私には翼がある。そしてこのアビリティ。

あらゆる神姫を凌駕するスピードとエイミング速度。

あらゆる神姫に及ばないLPや防御力。

……俺が全く格闘戦向きでないと教えてくれる。それがどうした。全ては叩き伏せ、ねじ伏せるための力。

Ready……？

最強の
――

1
……

イメージするは

2
……

高鳴る

3
……

鼓動が

S t a r t !

私だッ！

私の視界がHUDになる。全身のステータスが表示される。オー
ルグリーン。当たり前だ！

私は何も惜しまず、全力でフルブースト。一瞬で敵を追い抜き、
両方のニンブスを展開、ミサイルの雨を降らせる。それをヴーナ
は焦った様子で紙一重で避けるが、その着地硬直を待っているのだ、
私は。

そして狙い^{あやま}過たず、ライフルであるヴェルテクスからの光線の1
撃はヴーナを吹き飛ばした。

現在、相手のLPは3500。対する俺は950。なんてことだ。
一発で200程度しか削れない。

私は……^{わら}嗤った。

「その程度で……吹っ飛ばさないでよ。後まだ18発もブチ込んでや
らないといけないんだからっ、さあ！」

狙い済ましたようなLC5 レーザーライフルの狙撃をステップ
で……じゃない。当たる直前に左に1歩、歩くだけで避ける。

「そんなの……当たるわけがないよ」

全部見えている。敵の死角も。敵の弾道予測も。回避方向・方法も。全ての情報が私に入ってくる。人間だった頃ならとつくに脳がパンクしているはずだけど。そんなの関係なしに、私は私のために勝手に情報収集を続ける。

私は、今の私は。

正に、無敵。

10th Ride (後書き)

ゆかりん暴走中。

立て続けに武装神姫の更新をしたので、他の作品に取り掛かります。
ので、バトル後半は少しお預け……？

いえいえ、がんばってサクサク投稿するようにします。がつつかし
こ。

ではついでに、評価をポチッと……。

11th Ride

世界が歪む。右に、左に、上に、下に。私は今、バルカンの嵐とダンスしていた。

オート回避による着地硬直を無くす為に、マニュアル回避に切り替えている。爆散していく足場の上で華麗にバック転を決め、言い放った。

「武装神姫の名を語るなら……一発ぐらい中ててみたらどう？」

「上等ですファッキンシット！」

とはいえ、避けてばかりじゃな……。

やはり武装と場馴れから来るのか、最初の奇襲が終わってしまえば中てるのはかなり難しい。けれども、こんな場所で負けるわけにはいかない。勝って勝利を——べ、別にご主人様に捧げたいとかそ

ういうわけじゃ……。

「よそ見とは余裕ですねサノバビッチ！」

「チッ」

一気に距離を詰めてきたヴューナのレーザーソードが横薙ぎに襲い掛かってくる。俺はブーストを逆噴射してそのまま足を開き、股割のような体勢でそれを避ける。私はそのまま両足を引き戻し、その力のままスラスターを駆使して右拳を振りぬいた。

狙い過たずそれはヴューナの腹を捉え、彼女は姿勢を崩した。そこを好機とばかりにヴェルテクス2挺を向け、ゼロ距離でぶっ放しまくった。

バシyunバシyunバシyunバシyun！

受け身すら取れずに追撃を喰らいながら地面を転がるヴューナ。私は止めとばかりにニンブスからミサイルを浴びせる。

煙が晴れたとき、そこにはディコ・シールドを構えたヴューナがいた。

「流石にデザートはお腹一杯……というわけね」

「ええ！ とんでもない味でしたサック！」

銃口をゆらさぬままに敵をロックして、私は溜息をついた。

「その口癖。とてもアーンヴァルとは思えないわね。まあ、マスタ

ーがアレだったからしょうがないか……」

「マスターの悪口は……許しませんー!」

突如、ヴューナの動きが変わった。フェイントを織り交ぜた剣戟が私に襲い掛かる。

右から下段を通しての掬い上げるような逆袈裟斬りから転じて、流れるような鋭い突きに変ずる。

……だが、足りない。

そんなんじゃ、足りない。

私は突き出された剣の柄を、逆に前に出ることによって無理やり掴んだ。そして、一気にこちらに引き寄せる。

体勢を崩し、こちらに体を預けるようによろけるヴューナの頭を逆の手で掴むと、そのまま腹に膝蹴りをかます。

まだ、終わりじゃない。

ふらふらと地面から立ち上がろうとするヴューナをヴェルテクスの銃口で地面に縫い付ける。

あとは、おしまい。

悲鳴を上げて逃げようとするヴューナに向けて、いや、“向けて” 足りない。押さえつけた銃口はそのまま、文字通りの意味のゼロ距離で両手の引き金を引きまくった。

「やめろ、試合は終わりだよユカリ！ オーバーキルだ！」

ご主人の声も聞こえない。

きっと、私の口元は醜く三日月に歪んでいるだろう。……愉悦の笑みを浮かべて。

私はホログラムに変わり、風に吹き消えていくヴューナに向かって最後の一発を叩きこむと、空を仰いだ。手をかざし、目を細める。

私も足元からホログラムに変わっていく。ひとつため息をつくときご主人のことを想像して軽く暗い気分になった。

「ユカリ！ どうしてあんなことを！」

「実際に戦闘してるわけじゃないんだから、CSSCだって傷つかないし。勝負つてのは無情なものなんだよ、ご主人様」

俺とご主人は睨み合っていた。話は平行線。あの後ご主人は相手

の張野とかいうのに謝っていた。俺がぶいっと横を向いていると無理やり頭を下げさせられた。ぶんぶん。

そして今。休憩スペースの机の上で、俺はてくてくと歩き回っていた。

「私たちは神姫だよ？ 武装し、マスターの敵をことごとく討ち果たす姫だよ？ 過程はどうあれ、私は“神姫だった”よ？」

俺はそれっぽくテキトーなことを言ってみる。

「でも、ユカリ……。今度からはもっと紳士的に戦ってほしい。あ、淑女……。かな？ と、とにかく、ユカリが、その、怖いって……。思っちゃったから。自分の神姫のくせに、情けないマスターだよ……。でも、ユカリ。約束してほしい」

う、そこまでガチで言われるとは思わなかった……。別に根の深い問題じゃないし、テキトーに返事して、後はその場のノリかな……。。

俺は天板の上、歩みを止め、ご主人の顔を見てこう言った。今の俺には、こう言うしかなかった。

「わかった。以後気を付けるよ、ご主人様」

結局、ご主人の目は最後まで見れなかった。

こうして、俺とご主人の初の対外戦は終わった。

俺はご主人の頭の上に乗って部のメンバーのところに帰還した。意外と安定感のある頭の上だが、念のためと髪の毛を握りしめている。時々下から「痛い！ ユカリ痛い！」と聞こえてくるのは気のせいだと思う。

「あ、すみません。今戻りました」

神姫ブースのモニター前で待っているはずの部のメンバー。ご主人が声をかけるが、返事が無い。

のんびり屋のご主人は2、3度髪の毛を引っ張って、それでやっとなんか付いたみたいだ。部のメンバーに流れる緊張した雰囲気。

「かわいい後輩だから……って大目に見るわけにはいかねんだよ」

とは、裕明だ。なにやら剣呑な雰囲気漂っている。チャラ男っぽい風体だから、余計に凄味がある。タバコの煙さえもそこを避けて通っているようだ。

それに対するのは……。

「これは私の根幹にかかわる問題ツス！ 絶対に譲るわけにはいかないツス！」

小さな体で、精いっぱい虚勢を張っているように見える鈴莉。

いったい何があったんだ！？

ご主人の肩に留まって、2人で顔を見合わせた。

「あの、何が……」

「私が勝ったら、語尾を普通の敬語に戻してもらうつス！ コレ（語尾）は私のものツスよおお！！」

俺とご主人は同時に溜息をついた。

「なるほど。うん、まあ、何というか……、がんばって。2人とも」

俺はそういつとご主人の頭の上に戻り、「ろぼーき、はっしーん！」と叫んで髪の毛を引っ張って、カスタムスペースにその足を向けさせた。

俺は降りた途端に、土下座した。

11th Ride (後書き)

お久しぶりです。遅くなっちゃいましたが、11話のお届けです。

いやー。発売しちゃいましたね、mk2。そのせいで遅くなった…
…なんて、まさか、ハハッ。ハハハッ。

ほかの理由としては、謎の咳が止まらなくなっちゃってしまい、しょっちゅう長時間咳をしているのです……。

言い訳ですね、はい。がんばって早めに投稿します！

12th Ride

武装解除した俺はバトル台の横で、先輩の裕明と同級生の鈴莉の戦いをカスタムスペースから、モニターで見ていた。

なんと意外なことに、終始鈴莉が圧倒していた。だがしかし、マスター歴で比べれば裕明よりも鈴莉の方が長い。だからとは一概には言えないだろうが、鈴莉の方が圧倒しているのだろう。

鈴莉は中距離でオールマイティーに戦うタイプのような。アルトレーネ型の特性を利用しつつ、アルヴオPDW11で確実に削っていく。攻めと守りの時流を心得ているのがよくわかる。

「強いね……これは戦ったらただじゃすまないかも……」

そう言うご主人に俺も肯き返す。

「バトロンじゃ私だって負けないけど、バトマスじゃね……ご主人様の腕は知らないけど、勝てないんじゃない？」

そう言うてくるりと振り返り、俺はご主人を見上げた。

ご主人は頭をかいて「まあ、やったことないしね……」と頼りなさげに笑った。

その時、スツとご主人の隣に並んだ影が一つ。

それは、道着と袴に身を包んだ、見るからに、その、何というか……。

「イロモノ……。なんでこんなに神姫のマスターには変なのが多いんだろ……。ご主人様、お願いだから変な方向性には目覚めないでね……」

ご主人は乾いた笑いを返すのみだった。不安に不安を倍掛けした気分の中、そのイロモノがご主人に話しかけた。

「ふむ、話を聞くにバトルマスターズはやったことが無いそうだが……。どうか、私が一戦相手になろうか？」

いや待て。さすがに考え無しなご主人でも――

「いいんですか！？ ぜひお願いします！」

おいしい！！！！！！

変な人にホイホイ付いて行っちゃだめだろうが！

「おつと、申し遅れた。私の名は二之宮にのみや衛士えいし。これが連れの“ことり”だ。神姫共々、よろしく頼む」

項垂うなだれる俺を尻目に、ご主人が挨拶をしている。俺の頭の中は、
1つのワードで埋め尽くされていた。すなわち――

[illegible]

「どうしたのユカリ？ ほら、筐体が空いたよ。さ、行こうか」

俺は茫然自失したうちに手早く武装を付けられ、ステージに送り込まれた。

とりあえず相手を分析しようとする。敵を知り、己を知れば、と
いうやつだ。

「ご主人様、見たことない武装だよ、相手……。スペックはわかる？」

「うーん……。見たところ、ストライフをベースにガン。ラで外殻作った感じかなあ？」

ゾクリ、とした。ご主人、もしかして、もしかすると、化けるかもしれない。

普通は自作した神姫のパーツなんて知りようがない。しかしご主人はそのものズバリ言い当てたのだ。たぶん。

ひょっとして、**観察眼だけは一流……か？**

「……考えすぎ、かな？」

そう呟いた次の瞬間、前触れもなく電子音的なアナウンスが響いた。

—— Ride on !

バチンと何かが切り替わる感覚が体を支配し、意識はありつつも自分の体が自分ではないような、何かに侵食される気持ち悪い感覚を味わった。

なんだこれ……。体が動かないっ!?

『わー、すごいねユカリ！　これがいつもユカリが見ている世界なんだね!』

俺の視界を通して見ることできたステージ：コロシアムの風景を興味深そうにぐるぐると見回すご主人。

「それどころじゃないよ、ご主人様！　体の指揮権を返せ！　これじゃ、戦えないよ」

俺は結構マジで言うがご主人はどこ吹く風、そして無情にも試合開始のカウントダウンが始まる。

— 2

— 1

—— Fight!

と、とにかく索敵を——

ドンッという、衝撃。

俺は無様に吹き飛ばされていた。

何をされたかわからない。とにかく敵を見つけようとするが、いつものHUDも立ち上がらない。

「体をつ！ 返えええええええ！」

そう叫ぶと、無理やりその場から脇目もふらずにブーストジャンプし、距離をとる。耳元でブンツと言う音がし、髪の毛が何本か持って行かれた。

LPは！？ とつさにステータスを呼び出すと、最早200しか残っていなかった。

俺は背筋に氷が落ちるのを感じた。

「ご主人様、しっかりして！ 次、来るよ！」

『え、え？』

俺はまた、力ずくで足だけ支配権を奪うと、バック転で2撃、3撃目を躲す。

「しぶとい哉^{かな}、マスター！」

『応、“ことり”、征くぞっ！』

一系乱れぬマスターと神姫のコンビネーションで俺を追い詰めていく、二之宮&ことり。

それに比べて……。

「マスター、反撃を！ いや、とにかく敵のロックを！」

『だめだ、速すぎる！ ロックできないよ！』

結局。着地でオートバランサーが働いた瞬間に背中から一刀、刺し貫かれて、バトマス初戦は幕を閉じたのだった。

12th Ride (後書き)

初敗北のゆかりん。さてさて、ゆかりんはどうなってしまうのか！
投稿ストックなんて作っていないので、それは筆者にもわからない！

次回、なるべく早めの投稿頑張ります。

あと、独自設定のバトルとか、独自設定のランクとか作っちゃって
いいんでしょうか。読者のみなさんに質問です。

入れてもいいんじゃないかな？という方は、感想欄にてその旨を書
いてくださるとうれしいです！

13th Ride (前書き)

今回はちょっと短めです。ごめんなさい……。

13th Ride

「ご主人様あッ！ 敵をロックは基本中の基本デスヨ！？」

俺はそう叫ぶと、ご主人の揉み上げにぶら下がって全力でブーストを吹かした。

「あっ、いだだだだだだッ！」

ご主人は慌てて俺をつかもうとするが、俺はスルリとすり抜ける
と再び下に――

ブチブチッ

「いっおめんなさいいいいいい！！！！！！」

空中土下座というものの存在を初めて知った。

妙に揉み上げが左右不均等になったご主人を前に、俺は反省会を開いていた。

「ご主人様！ どうしてロック出来なかったの？ 私のアビリティがあれば早期ロックは可能だったでしょ？ 事実、私だけなら絶対ロックできてたねっ！」

「そうは言ってもユカリ。僕は初心者だし……。それに尖りまくったユカリの性能を一回やそこらで引き出そうってのは土台無理な話じゃないの!？」

あーでもない、こーでもない。俺たちの反省会はお互いの欠点をあげつらうだけのものになってしまっていた。だが、そこに現れたのは救世主……。なのだろうか？ とにかく、予想もしなかった人物が現れた。

「その少年……。何をもめているんだ？」

外国人だった。

予想できるかっ！

俺とご主人は言い合いも忘れてじっと見つめてしまった。

「ああ、すまないな。俺の名はレイル・ア・ウォルコット。22歳。このゼルノグランド、“マイブリス”のマスターをやらせてもらっている。マスターランクはA++だ。君は見たところマスターランクDのようだが……。始めたばかりの新兵^{ルキ}といったところかな？」

さて、ここで一旦「マスターランク」について話しておかなければならないだろう。マスターランクとは、バトルしたポイントによってそのマスターと神姫が格付けされる、という一種の実力の指標だ。上はS++から下はD-まで。Fバトルのランクとは別に、存在する。

さて、そんないきなり怒涛のごとく喋りだす謎の外国人に啞然とする俺だったが、しかしご主人は違ったようだ。

「レイル・アさんって……まさか、あの！？ Fバトルでも上位に食い込んで、超有名人じゃないですか！？ な、なんでこんな所に……」

彼はH A H A H Aと笑いながらご主人の肩を叩いた。

「俺だってマスターの端くれ。たまにはこうやって休暇の時ぐらいバトル会場に顔を出すさ。……で、君とそこの神姫との不和は先程のバトルかな？」

俺はぼーっとしていたが、その言葉に再起動を果たす。

「そ、そうです！ さっきのマスターは不甲斐無いつたら……。もう！」

「それだ」

「そ、それ？」

俺は急に鋭くなった彼の雰囲気驚きつつも、反射的に聞き返してしまふ。

「基本的に、『バトルマスターズ』は経験が……そして何よりも信頼関係が重要だ。お互いが信頼しあっていないと、ただ足を引っ張り合うだけの物となってしまう。先ほどの君たちのように」

た、確かに……。

「何よりもまずは訓練だ。一人用シミュレータがあるだろう？　そこで仮想敵相手にいくらでも練習を積むといい。もし良ければ、俺が暇な時なら付き合ってもできる。ほら、少年。ケータイを出すといい。これが俺のアドレスだ」

ご主人は何というか……目を輝かしている。

しかし、確かに理想的なのも事実。これほどの強敵が味方になって練習に付き合ってくれば、ご主人のランクアップも早いものとなるだろう！

「……おっと、俺は時間が押している。今日はすまないが、相手になつてやれそうにない……。また合う機会も作ろう。後進が育つのは見ていて気持ちのいいものだしな。それでは、Bye - Bye」

なんだか嵐のように去って行ってしまった……。

と、ちょうどその時だった。入れ違いに部のメンバーがやってきたのは。

「いいいいいいやったっスよおおお！　アイデンティティは、守り通したっスよ！」

鈴莉だ。どうやら裕明とのバトルに勝ったらしい。

「くそ、無念……一年坊主に負けるとは……」

そこで部長が、今日の締め、とばかりに手をパンパンと叩いた。

「はいはい。今日はみんな、何かしら得ることがあったようだったよ。今度もまた楽しみながらレベルアップしちゃいましょう！　さて、じゃあ、今日はお疲れ様でした！」

「……お疲れ様でした！」「……」

こうして、俺たちの初めての遠征は終わったのだった。

「あれ？　このパンフレットなんだろう」

「ご主人ー。勝手な行動はダメよー」。

13th Ride (後書き)

すげえぜ！なんか見てみたら総合評価400pt超えの、お気に入りが100件超え！？

もーびつくりですよ！

ユニークも10000行ったしPVにいたっては50000ですよ！

みんな、みんな、大好きだー！ 本当にありがとう！

感想・評価ポチ待ってます！

14th Ride

今日も今日とて部屋に向かう、俺とご主人。ご主人もようやく工具セットを自前で購入し、それっぽくなってきた。

「こんにちはー！」

「へろーう」

今日の挨拶はイングリッシュ。うん、そんな気分だった。他意はないんだ。

私はご主人のポケットから肩に飛び移ると、そのまま近くのテールに飛び移った。ぐるりと見回すが、誰もいない。挨拶損だったか！

「今日は一番乗りみたいだね、ユカリ」

「そうねー。やはりスピードで私たちに勝てる神姫はいないっ！」

くるりと回り、決めポーズ。いやー、歳柄もなく（中の人2X歳）やってしまったけれど、いいね、堂々とこっというのが出来るのって。

「あれ？ 誰か居るっスか？」

そう言って奥の準備室の扉が開いた。そこには着替え途中の……
鈴莉がつ。

> i 3 4 8 4 0 — 2 6 5 6 <

「うわ、ご、ごめん！ 見るつもりじゃ……」

そう言っただが、慌てているのはご主人だけだ。

「あはは、そんな慌てなくていいっすよ。そんなセクシーなカットじゃないっすから。でもま、着替えてくるっすね」

そう言っただけで奥に引つ込む鈴莉。青いのう、ご主人。これはこう言っただけで楽しむのよ！

扉が閉まる直前、俺はそこに滑り込む。

「りんりー！ 私もお着替えー！」

そう叫ぶと鈴莉の少々薄い胸に飛び込む。

「きゃっ、くすぐったいっすよ、ユカリ！」

そのままでも胸ポケットに移動しようとしたとき……感じる殺気ッ！ 私は一瞬でそこから飛びのき、準備室の机の上に着地した。

視界に映るのは……エンネ。少々型落ちしたとはいえ、未だ最新鋭機の貫録は健在か。

しばらく相対して睨み合っていると、エンネが口を開いた。

「あなたからは邪な気配しかしないのですっ！ この場でたたっ斬らせてもらうのです！」

「ふん、大口をたたく……。負けた時、悔しいぞ？」

即座にHUDを立ち上げ、全身の力を抜く。だらんと両肩は垂れ下がったままだ。

「武装もしていないただの神姫相手に負けるいわれはないのです」

その瞬間全モーターを駆動してトップスピードに移行。俗に云う、ブーストダッシュBDだ。

「その、ただの神姫にテメエは負けるんだよオオオオ！」

相手の間合いは試合を見て見切っている。一瞬しか見ることができなかったが、その間合いは私の目の奥に焼き付いているんだ！

エンネの予備動作を完全に見切り、間合いギリギリで急制動、相手を中心に左へ高速ステップ。人間がこんなことをやったら、グレイアウトどころか……。いや、これは少し違うか。とにかく失神どころでは済まない症状になるのは間違いない。

私は無造作に蹴りをたたきこむ。しかしギリギリでそれを防がれるが、ブーストジャンプしながら放ったそれは容易に防げるものではない。

私は勢いを殺さず倒立反転を始動とした、逆方向からの拳打で体勢を崩したエンネをふっ飛ばした。私はためらうことなく追撃を選ぶが、エンネの立ち上がり際の斬り上げで、一瞬足を止めてしまった。だからこそ、バックステップ。しかし、私は見誤っていた。エンネの実力を。

間合いが、伸びた。私はぞくつとした感覚に従って右に体を投げる。結果的にいうと、それは正解だった。左腕に引っかけた剣先。その剣——ジークリンデ+ブリュンヒルデは、ブリュンヒルデにちよつとした改造がなされていたのだ。スラスター……。それが、私の左腕の明暗を分けた。

スラスターのブーストにより無理やり広げられた攻撃範囲は、私の左腕をいとも簡単にもぎ取っていった。

その瞬間、走る激痛。

「痛ツツツてエエエエエ!!! やってくれたわね、この鉄屑があら」

HUDは赤く染まり自分のアラートをひっきりなしに伝えてくるが、すべてのマイナスインフォをカットする。私はその場に落ちていた釘を手にとると、錆だらけのそれを手の内で弄び、しかと握りしめた。

脇で鈴莉が騒いでいるが、そんな問題ではない。これは、矜持だ。武装神姫として、マスターの名誉のためにも負けることは許されない。

ソウ、ワタシハ、負ケルコトハ許サレナインダ——

「ジェノサイツ」

一言だけ残すと、私は青く染まったHUDの中、駆け出した。が遅い。何もかもが遅い。故障のせいだろうか。私の一挙手一投足も、エンネのBDすらも。

エンネのBDすらも？

すべてを、理解した。ああ、このカラダは最強だ。私が私を正しく理解してあげれば、いくらでも新たな力を提供してくれる。いくらでも勝つ手段を提示してくれる。

ブーストして加速するエンネのジークリンデを軽く避け、捻り込みながらの突きを首めがけて繰り出す。そして、静止。

「私の勝ちね」

エンネはその場で崩れ落ちた。

「私の、負けなのですか……」

私はゆっくりと釘を手放すと、意識を手放した。

今は……ただ、……眠いんだ……。

「Set up・Checking all device・
……All systems GO・ユカリ、再起動リブートします」

よく見知った天井だ。

規則的な天井の梁に、石膏ボードのようなプレート。ええ、部室ですね。

「すいませんでしたアアア！」

俺は意識が覚醒すると同時に仕出かした事の重大さに気づき、パーフェクツ・ドゲザをしたのだが……足りない。パーフェクツなドゲザには、何かが足りない。

「あ、左腕」

「『あ、左腕』じゃないでしょ！　なんでそんなに冷静なの！？」

ご主人は慌てているが、俺はへらへらと笑った。

「いやー、マジすみません。御苦勞かけます、ご主人様」

隣に立っていた鈴莉が、本当に済まなそうに謝る。

「ウチのエンネが……申し訳ないっス」

「ツン！」

エンネだけは謝る気がないようだ。

「エンネ！」

対して俺はそんな態度も気にすることはなかった。

「いいって。これは元はといえば俺……私が悪いんだし。ね？」

困った顔でご主人も笑う。

「とにかく、修理をしないと。余ってる腕パーツってある？」

「えーと、私はないっス」

その時、部長たちが部室に入ってきた。

「いやー、ついに明日っスね……明日ですね、予選」

「そうだね鈴木君、あ、一年の子には伝えたっけ？」

俺たちは顔を見合わせた。

「明日？」

14th Ride (後書き)

武藤遙矢さま。鈴莉の絵を描いてみました。拙い絵で申し訳ありません……。読者の皆様も、お目汚しでなければいいのですが……。

そしてユカリ悪役回。完っ全に悪者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709s/>

武装神姫 ~ Veuillez m'aimer ? jamais ~

2011年11月17日17時59分発行